

# 沼津市若山牧水記念館

第29号

2002.10.1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会  
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11

TEL・FAX (055) 962-0424  
http://web.thn.jp/bokusui/

この二枚の短冊は、牧水夫妻から、美濃の田中緑夜夫人はつ氏に贈られたものである。娘さんの泰子さんに引き継がれ、綺麗な額に二枚一緒に入れられて大切に保存された。このたび、名古屋に住む泰子さんとご主人の丸山寿典さんから沼津牧水会に寄贈された。「私たちが持っているより記念館で多くの方に見ていただいた方が父母も喜んでくれるでしょう」ということであつた。

大正十四年六月三日、恵那地方に揮毫旅行に出かけた牧水夫妻は、午後三時五十分岐阜大井駅に着いた。出迎えたのは田中緑夜と綿引蒼梧。案内されて町の市川旅館に投宿。その夜は二人を含めた地元の社友とともに歓談。翌日から七日まで揮毫をして、八日は恵那峡に遊び、九日に長野に向かった。

綿引蒼梧は当時三十二歳の教師、本名惣吾。田中緑夜は本名耕平、当時三十歳。三河足助町生れで父の家業を継いで材木商を営



寄田中緑

葉がくれにさき匂ふ蘭の美しさ

夜夫人歌

もちたまふ君と讚へまつらむ 牧水

田中

なごやかにわれをむかへてにこやかに

夫人に

とりなしたまふ君のゆかしさ 喜志子

七十七年前に書かれた短冊が、牧水を慕い、愛する人によって残され、いま、こうしてそれに出会えたことをよろこびたい。

なお、歌集『黒松』の中に「旅中即興の歌―信濃揮毫行脚記より」と題した一連の歌があるが、その中の一首

うちあふぎよしと眺めき眞盛りの櫻きり来て挿してまたよしの牧水自筆短冊と喜志子さんの牧水を「追慕」する歌

追慕  
寒竹はむらさきだちて霜のうへに  
ならば生ひたり見せたきものを

および、昭和四十年に田中緑夜が亡くなられた折の喜志子さんの

甲歌  
はかなきはいのちなりけり君もまた  
つひに先たちかくれまじつる

の短冊も寄贈された。「みなかみ紀行」「山櫻の歌」の初版本など  
もあわせて寄贈していただいたことを付記する。(須永 秀生)

んでいた。綿引蒼梧に誘われて大正十一年に「創作」に入会。熱心な社友で、後に歌集『現身圖』を出している。大正十四年の「創作」をひもとくと、彼の作品が多く発表されている。二首紹介しよう。

田螺たにしとる娘らがかむれる手拭の端ひるがへる春寒き田に

つつ鳥のこゑに聴き入り忘れぬし盃の酒は冷え果てにけり

「つつ鳥の……」の歌は、牧水の岐阜大井町での揮毫の際に、綿引蒼梧の家で牧水と酒を酌んだ折の作品である。

さて、標記の短冊は、田中緑夜夫妻の心からの欲待に感謝した牧水と喜志子が、それぞれ即興の歌をばつ夫人に贈つたものである。牧水全歌集には載っていない。こんな形で即興の作品は各地に残されたのではないかと思うが、出会うことは稀である。

# 牧水の千本松原

馬場あき子



には、その頃の作として「沼津千本松原」六十一首が収められている。もう冬近い晩秋の作品である。

鴉の鳥なきかはしたる松原の  
下草は枯れてみそさざいの声

窓さきの竹柏の木に来て啼ける百舌鳥羽根ふるはせて啼きてをるなり

老松の幹の荒肌の日ぞさせる寂びて真しろき冬の日の色

森なせる犬ゆづり葉の実を啄むとつどへる小鳥うちひそみ啼く

牧水の日記をみると、大正十五年八月十一日、沼津日々新聞に寄稿するために「沼津千本松原」の一文をかいている。これは当時、静岡県によってすすめられつつあった松原伐採計画への反論であるが、さらに翌月の九月六日から七日にかけては、時事新報のためにもう一度「沼津千本松原」がかかれてい。この二文は『若山牧水全集』（増進会出版社）第十三巻に収められているが、自然に対する後期牧水の視座がよくわかり魅力的である。

自然と、そこに棲息する生物との循環作用の深さがあった、はじめて本当の生きた自然といえるという視点は、私たちが思う今日の切実な自然問題とも共通する大きなテーマであるが、それが牧水の作品を読む上での大きな鍵になっているのである。大正十三年八月九日、沼津千本浜に転居した牧水は、しばしば千本松原に散策に通い、いつかこの松原の辺りに住みたいと思ったという。歌集『黒松』

これらの歌には、牧水の後期作品の特色である、静かな心境にいて細かく丁寧に物をみきわめる視座が定着しているが、さらにいえば、千本松原を愛する牧水の眼は、自然と生物の默契のような生の循環の密接さを、深い肯定の心で受け止める独特の視座が出されている。

第一首の鴉とみそさざいの関係も、鳥の生態を少しでも知る人にとっては、じつにやさしくあたたかな把握なのだ。鴉の中には冬さらに南下するものがあり、みそさざいは夏に山地に棲み冬は山麓に下る日本では最も小さい鳥であるみそさざいは、啼きかわしつつ派手やかに木の实を啄んでいた鴉が去ったのち、その樹下の下草にやって来て、小さい草の实のこぼれを啄むのである。そして鳥たちの糞にやしなわれる大地があり、草木がある。

沼津日々新聞 大正十五年八月十一日 (沼津三三館寄稿)

沼津千本松原 若山牧水



歌人若山牧水氏 昭和十一年

壺と安全か 燕雀没談 伊

日四十月九年五十五正

時 事 新 報

牧水はそういう自然の生命の深さに、あるとうと  
さを感じ取っているのである。ある日、牧水の家の窓  
さきに立つ竹柏の木にやつてきた百舌鳥が「羽根ふ  
るはせ」て全身でよろこびを表現しているのも、百  
舌鳥の餌とする虫や小動物が冬籠りのため肥えてい  
るのを知るからであろうか。そして亭々と直立する  
老松の頼もしい荒肌に差す日差の、しみじみと白い  
冬の感じ、そこには長く生きてきた樹木の、人生に  
も似た表情がある。



沼津千本松原

若山 牧水

私に誘われて来て、いつか  
年配つて、或はこのまゝ、此處に居  
留ることに成るかも知れないが  
沼津への旅費があるではないが  
唯だ一つ私の口癖するものがある  
千本松がある。

千本松が位置しな松が揃つて  
まことの位の人さき野をわづら  
松林は恐らく他に無いとおもふ  
沼津の川口に起つて、千本松  
沼津の川口に起つて、千本松  
片岡原、即ち千本の浦の海に接し  
松林に接しながら、西平市  
の川口に及んでゐる。長さにして  
四里半、幅は二里、二四  
町の松林を築つて置いて、この  
の全長を千本松といふは或は松  
らなかも知れないが、而も千本  
の松と云ふに、合つて置き置つ  
てあるのである。而して千本松  
千本松が、即ち沼津千本松を中心  
にした途が最もよく、左つて居る  
松が多し。松一、二、三、四、五、の  
の松の根が、根をめぐり、ついでに  
んで、松をめぐり、ついでに

新作家小論

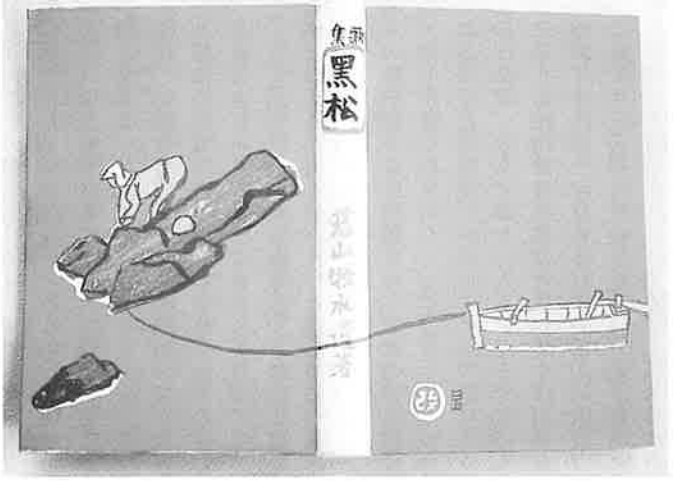
奎一郎小論

北村 英爾

こういう千本松原が伐採されるといふのであるか  
ら、牧水の心はおだやかではない。日日に激昂して  
くる。牧水はその豊富な旅に出会つた松原を想起し  
つつ、その生態系の整いにおいて千本松原を日本一  
と位置づけた。その理由の最たるものは、「この松原  
が単なる松樹の並立にあらずしてその下草に無数の  
雑木を茂らせてゐる事である」「茂つた樹木の枝葉の  
蔭になりしだれた果実に寄りつどふさまさまの小鳥  
の啼声を諸君は知り給ふか。この沢山の小鳥の啼声  
こそは、千本浜公園に更に五十の池が掘られ百の噴  
水塔が立てられ一萬二万の電球が吊りさげられるよ  
りかも難有い天与のたまものであらうと思ふのだ」  
という点にある。

さらに牧水は、第二の文においていふ。それはそ  
の名も千本山山乗運寺という寺の増上人が、相模の  
北条と甲斐の武田の闘争の戦略地点となつた千本松  
原に、松が一本残らず伐採されて荒涼とした石原に  
なつてゐるのを見て、発願し植樹した昔のころの  
とうとさについてである。上人は一本の松を植える  
たびに阿弥陀経を上げながら、辛くも千本を植えつ  
けたという。松原が絶えていた頃、潮風で出来なく  
なつていた作物もこれによつて復活したという。

牧水はこの植林逸話に単なる自然だけでないもう  
一つの感動を覚えたのである。戦乱によつて荒廃し  
た自然を回復しようとするまごころに生まれた松原  
が、浅はかな人間の現世的欲求によつてほしいまま  
に伐られることへの憤りは、多くの市民へも及び、つ  
いに九月十一日、沼津市の劇場国技館での「千本松  
原伐採反対市民大会」へと発展した。牧水は出席し  
て熱弁を振り、伐採計画は立ち消えになつたという。  
おそらく牧水が、生涯の中でこれだけ積極的、



自らのことをさしおいて社会正義の念に駆られ、激  
しい行動に出たのはこの時だけだったのであるま  
いか。それは取りもなおさず、牧水の全き自然への  
愛そのものだったといえるのではあるまいか。

《筆者プロフィール》 歌人、評論家。東京井荻町生まれ。一九四  
七年『まひる野』入会。喜多流宗家に入門。日本女子専門学校卒。  
中学校、高等学校に勤務。一九七八年『かりん』創刊、それ以後  
ずっと発行。古典芸能を深く追求しつつ、前衛短歌や独自の女歌  
の世界を確立し、現代短歌に新しい領域を拓いた。  
歌集には『早笛』『無限花序』『桜花伝承』『ふぶき浜』『葡萄唐  
草』『換歌』『阿古父』『昔記』など十九冊がある。  
評論には『式子内親王』『鬼の研究』『和泉式部』『歌枕をたずね  
て』『修羅と能』能の深層美等多数。NHKのテレビやラジオで  
も活躍。詩歌文学館賞、読売文学賞、毎日文学賞、朝日賞等を受  
賞。紫綬褒章受章。

紹介

牧水の「随筆」と「紀行文」



『若山牧水随筆集』  
(講談社文芸文庫)  
(2000年1月10日刊)



『新編 みなかみ紀行』  
(岩波文庫)  
(2002年3月15日刊)

己の心の底や魂の慟哭など、あらゆる面から牧水に近寄れそうな歌ばかりが集められています。どれもみずみずしく、読むものの心にすっと入り込んでくる感じます。この百二十首で牧水短歌のすべてを分かったような気になるのは粗忽だし、傲慢でもありません。そう思わせる内容です。

随筆の方は、旅の様子や行く先々での出来事が書かれている。『山旅の記』、幼い頃や故郷坪谷村のこと、家族や親戚のことなどが記された『おもいでの記事』、日々の暮らしの中での出来事や思いなどが書かれた『折りおりの記』、石川啄木との関わりと臨終までの生々しい様子が描かれた『石川啄木の記』と大きく四つに分けられています。どれも読みやすく、読む者がそれぞれの情景を思い描けるような書き振ります。『おやまあ、そんなことがあったのですか』などと声を掛けたいような親近感の持てるものから、人間としての深い悩みや厳しい自己追究には、とても入り込めないような距離を感じさせるものまで、牧水の深さや広さを改めて認めさせられる内容と表現だと思います。また、時に『枕草子』を思わせ、『徒然草』を連想させてくれるところもあって、楽しませてくれます。

『若山牧水随筆集』には、選りすぐられた百二十首の短歌と二十四篇の随筆が収められています。短歌には、一般によく知られている、「白鳥は…」や「幾山河…」、「白玉の…」をはじめとして、自然を歌ったもの、故郷を思い描いたもの、父母を思いやる心のうちや身近な生活に目を向けたもの、旅先での旅情、常に親しみ慰められたお酒のこと、さらに

素人の勝手な読みを、巻末の玉城徹先生の解説が、ぐっと学問的、文学的にまとめ解いてくださるので、さらに充実した読後感を持つことができます。

『新編 みなかみ紀行』は、表題の「みなかみ紀行」が中心に据えられ、全編のほとんどが紀行文で占められています。

牧水の紀行文は、あたかも修行僧か行者のように、ひたすら旅をする牧水に、同行者か門人の一人として一緒に旅をさせてもらっているような気分がさせられる不思議な文章です。霜柱の立った凍てついた山道を、下駄を脱ぎ捨てて裸足で歩く様には畏敬を感じ、やっとたどり着いた宿で、温泉や酒を存分に楽しむ姿には、安堵感と微笑を覚えることでしょう。行く先々での人との出会いやさまざまなエピソードも楽しく、人間洞察の深さや確かさに思わず引き込まれてしまいます。また、山や渓谷などの風景や小鳥の鳴き声などの自然描写には、リアルタイムでその場に居合わせているような、あるいは、映像を見ているような気分がさせてもらえて心地よいひとときが過ごせます。

牧水の、未知なものやまだ見ぬ地への若々しい好奇心と探求心には、さらに驚かされ、わくわくしたり、どきどきしたりしたりできるのも喜びです。「みなかみ紀行」が、牧水が生涯、求め愛しつづけた「水」つまり「川」のみなもと探しの旅でもあったなんて、「目からうろこ」です。

巻末の池内紀先生の解説では「牧水の旅」が深く面白く掘り下げられており、「なるほど!」というならせられること必定です。この二冊は、牧水に詳しい人も、そうでない人も、十分に楽しめる本だと思います。両冊ともに『沼津千本松原』が収められているのは大変うれしいことです。当館には、両文庫をはじめ、牧水に関する出版物が多数揃えてあります。(眞木美紗子)